これは、上昇調か強調かの違いが、伝達行動の質や伝達内容そのものを左右することによると考えられる。つまり、「絶対来る！>」と「絶対来る？↑」や、「本当にいいの！>」と「本当にいいの？↑」は、それぞれ違うことを意味するため置き換え不可能だということである。いずれにせよケース数を増やしより大規模な知覚実験を行って確認する必要はあるが、境界は微妙でも、典型に関しては、停滞調や昇降調以上に離散的だと考えられ、典型への集中度も高いことが予想される。ただし、いわゆる「擬似疑問」(「半クェスチョン」)などの非文末の上昇調や、「先生口調」、「子供の朗読口調」と呼ばれるような非文末の強調は、停滞調や昇降調と似た性質を持つと考えられるから、この限りではないだろう。他のイントネーション型との連続性という問題とともに、同じイントネーション型内部における、文末と非文末という出現位置の違いによるカテゴリーの離散性(連続性)とも関連してくる問題だと考えられる。この点も別稿に譲らなければならない。

以上、本研究の結果からも、各イントネーション型は、典型的な音声は離散的ではあっても、周辺例、境界例に関しては音声的にも意味、機能的にも相互に連続性が見られ、その境界を確定することが困難であることが確認できた。そして、その境界の曖昧さに関しては、各イントネーション型の間で差があり、平調と上昇調、強調のように、伝達内容そのものが違い、互いに置き換えることができないものの方が比較的境界が明確になりそうなのに対し、昇降調、停滞調のように、極論すれば情報内容について差異をもたらさない、程度差であるような文(話)体的な表示機能を持つイントネーションでは、境界が紛れ易いのではないかとの予測ができた。したがって、英語やこれまでの森山(2001)、杉藤(2001)など日本語イントネーションの実験的研究の成果と同様、本研究結果からも、日本語のイントネーションの類型に際して、プロトタイプによるカテゴリー化が有効であることが実証的に確認できたものと考える。

5-2. 各章の概要

ここでは本研究の第1章から第4章までの概要をまとめた上で、本研究が明らかにした日本語音声談話の韻律構造がどのようなものであったか、どのような意味を持つのか明らかにする。特に5-2-1では本研究の言語研究史上の位置付けを明確にし、5-2-2では本研究で取り上げたいわゆる「尻上がり」イントネーション研究が社会言語学的にどのように貢献し得るのか、5-2-3ではイントネーションの客観的な類型化が確立した意義は何かを再確認する。5-2-4で、本研究を通じて「話調」がいかに科学的分析に耐え得る実在であるか踏まえた上で、5-2-5では各種談話の韻律構造の解明にあたって本研究がどのような学問的貢献をなし得るか、その意義は何かを考える。

5-2-1. 第1章の概要と本研究の言語学史上における位置付け

第1章ではイントネーション研究史を3期に分けてたどり、各時代の先達諸氏のイントネーション観やその定義、分類、記述方法の問題点について述べてきた。

第1期である1950年代以前は、十分な研究機材もイントネーション研究への機運も乏しかった。イントネーションの定義は十分確立していたとは言えないが、このような中で、寺川(1945、1951)や石黒(1950)など、アクセントや文末のイントネーションにとどまらず、文全体、談話全体の音調に着目した研究があったことは特筆に値する。特に「話調」という言葉を最初に提唱した寺川は、彼自身の「話調」の定義と実際に彼が「話調」として扱ったものに隔たりがあり、後の金田一(1951)らの「話調」とは同一のものでなかったにしても、その点は評価されるべきだろう。

第2期(1950年代～1980年)はイントネーション研究が本格化した時期である。この時期はイントネーションをほぼ文末イントネーションとして扱い、国立国語研究所(1955)、吉沢(1960)、宮地(1963)などによりイントネーションの実証的研究が行なわれた。談話全体を貫く言葉調子「話調」について金田一(1951)、秋永(1966)が具体例を挙げたが、イントネーションの問題として積極的には取り上げられなかった。宮地はこれらのうちあるものは、部分的には曲調的イントネーションの一つである卓立表現イントネーションであり、全体としては装飾表現イントネーションであるとして、イントネーションの問題であると看破したが、これらを科学的に扱うまでには至らなかった。

第3期(1980年代以降)は日本語ブームに伴い日本語イントネーション研究が隆盛した時期である。日本語を話し言葉として必要とする非日本語母語話者の人口が急増し、日本語教育・日本語研究の中でも日本語音声に対する関心が全般的に高まった。理工系、情報通信系の研究においても人工対話システム(ヒューマンインターフェイス)の開発のため、日本語の音声研究が盛んに行なわれるようになった。音声分析ソフトの開発、普及も、言語学以外の分野での音声言語への関心に起因しているが、これがさらに日本語学・言語学における音声研究に拍車をかけた。

音声分析ソフトの利用により、文末表現に限らず、文全体の音調に関しても客観的に記述することが可能になった。また様々な実験的手法によるイントネーションとその知覚や統語構造との関係を探る研究もなされた。さらにLiberman(1975)、Pierrehumbert(1980)らの自律分節理論アプローチの影響を受け、統語構造と韻律を音声的実態に照らしてより具体的実証的に論じる新しいイントネーション研究が日本語についてもPierrehumbert & Beckman(1988)、窪薗(1988、1995、1997)らによってなされた。この時期の特徴はイントネーション研究の「視覚化」、「客観化」にあり、その定義も、韻律を構成する高さに関わるより広範な音調全体を指すことが一般的になった。本研究でもイントネーションを韻律の一要素であり、「文」以上のレベルに現れる音調全般として扱った。

しかし、これまでの研究を通じて談話においてイントネーションを扱うものはほとんどなかった点や、特に社会言語学的視座からのイントネーション研究が十分でなかった点、イントネーションの記述方法などが確立していない点については第1章で指摘した通りである。換言すれば、これらの点が今後の日本語のイントネーション研究の主要な課題となるだろう。言語研究全体の流れから考えて、日本語イントネーション研究においても「文」より大きい単位である「談話」を射程に入れることは当然とも言える。また語用論や会話分析の隆盛から見て、言語のよりinteractionalな面に光を当てることも当然であろう。そして、イントネーションの記述方法の確立は、イントネーション研究のみならず、会話分析、日本語教育においても急務であるが、その際先の5-1で述べたプロトタイプ・カテゴリーの視座は重要である。

本研究は日本語イントネーション研究が言語研究史の全般的な流れのなかで新たな段階へ進むための一つの叩き台としての役割を果たしたものと考える。特に判別分析によるイントネーションの類型作業は、従来の主観的な類型作業とは違い、音声的現実に基づいてより客観的に検証することができ、日本語の句末イントネーション研究の記述段階での滞りを解消する一助となった。またこれは、既に5-1で述べたように、以前から問題視されつつも避けられていた感のあるイントネーションの離散性の問題に正面から取り組むための一つの資料としての価値もあると考えられる。このように客観的に句末イントネーションを6種に分類した上で、さらに、各談話種別にこの句末イントネーション型の出現状況やその他の韻律的要素をも視野に入れて韻律面から各種の談話ごとの特徴を捉えようとの試みは、日本語の研究ではまだ緒についたばかりだ。英語においてはかなり以前からCrystal(1975)、Crystal & Davy(1969)、渡辺(1985、1994)らによって、談話種別ごとのイントネーションの現れ方やポーズの配置、発話速度の違いに関する実証的な研究が行われていたが、日本語でも今後このような試みがより広く行われるべきである。本研究は、将来的に日本語における広範かつ談話横断的に韻律構造を解明していくための一つの礎石として位置付けることができる。

また、本研究はある意味で、談話種ごとに独特の全体へのフシ付け、つまり「話調」(「ある談話場面における話者の何らかの意図・情緒の表現に関わる、談話全体に現れる韻律的諸特徴の合成としての音調」)が存在するという仮定の検証であるとも言えるが、「話調」というものを取り上げるのは、まさに言語のinteractionalな面に注目するからに他ならない。また、本研究が寺川(1945)の「話調」という言葉を再定義して敢えて起用したのは、日本語のイントネーションを他の韻律的特徴とともに談話レベルで明らかにしようという意図があったからだけではない。「話調」を一般的な言い方で表せば、言葉調子、口調などとも言うことができ、ある場面やある話者の話し方から受ける漠然とした全体的な聞こえ方の印象に関わる音調であるとも言えるだろう。しかし、そのような漠然とした印象をもたらす音調、つまり「どのように(言うか、言われたか)」が、実は少なくとも日本語でコミュニ

ケーションを行う上では、「何を(言うか、言われるか)」というtransactionalな面と同等かそれ以上に重要であると考える。社会言語学は、このようなinteractionalな面により強い問題関心があるため、この「話調」を客観的で科学的な分析の対象として位置付ける必要があると考えたのである。

仮に言語が一つの閉じた記号の体系であったとしても、これを理解するにはその体系の外側の現実を無視することはできない。このことは言語と社会の相互作用に関心を持つ社会言語学だけでなく、言語や社会を捉える人間の知覚自体にも関心を寄せる認知科学の成果からも疑い得ないだろう。言語において言語「外的」現象を視野に入れなければ、「木を見て森を見ない」ことにもなりかねない。本研究では、言語研究史上、避けられない視野の拡大と社会言語学的視座の必要性を、韻律研究と談話研究の接点である「話調」の科学的研究を通じて提示した。

本研究第2章では、特に言語と社会の関わりを具体的に示す一事例として、いわゆる「尻上がり」イントネーションを取り上げた。次の5-2-2では。第2章の概要及び、いわゆる「尻上がり」イントネーションとは何であったのか、について再び述べる。

5-2-2. 第2章の概要：いわゆる「尻上がり」イントネーションとは何だったのか

第2章ではいわゆる「尻上がり」イントネーションの詳細な音響的分析を行い、実際の談話での使用例から談話文法上の機能を明らかにするとともに、当該イントネーションが付加された発話に対する聞き手の印象に関する実証的調査をもとに、当該イントネーションに対する各種のステレオタイプとその原因について社会言語学的に考察した。

当該イントネーションを伴う発話は、これを聞く人に「幼い」、「甘えた」などの印象を与えるが、それらの印象が単純に音響的特徴によってのみ決定されるのではないことは、井上(1994、1997)、原(1992、1993a)で確認されている。当該イントネーションの認知が実際非常に複雑であることも確認された。これは、いわゆる「尻上がり」イントネーションという言葉が指す音声は、どういうものだと考えられるかという意義論的観点と、逆にそれぞれの発話音声中のイントネーションが何(という名前)であると考えられるか、という名義論的観点の不一致を物語っているとも言える。これは、5-1のプロトタイプによるカテゴリー化との関連で、Taylor(1989)、テイラー(1995)が区別するところの「専門家カテゴリー」と「通俗的カテゴリー」とも関わっていると考えられるが、MacLaury(1987、1995a、b)の色彩語による色見本の名指しと色見本の色彩名による振り分けが一致しなかったという実験結果との共通性も見られ、興味深い(注1参照)。当該イントネーションに限らず、各イントネーション型とその意味の離散性と連続性については5-1-3で既に見てきたが、当該イントネーションに関しては、さらに実際の機能と印象などの社会的な意味付けとの差が見られ、世代間での差異があること

も伺えた。

当該イントネーションの実際の機能と社会的に付与された意味や機能の違いについての議論は後述するが、はじめに前者についてまとめる。当該イントネーションには構文や情報内容の切れ目を示す文法上の機能のほか、継続を積極的に示し、話順を確保しつつ聞き手の注意を喚起する機能がある。そして聞き手に対しては対話への相づちを通して積極的に参加を促す談話上の機能がある。したがって実際の使用場面は、やや改まった場で何かを説明したり、自分の考えを述べたりする場面である。ただし、若い世代で「場面」よりもその「機能」により、使用している傾向が強いと言える。このような談話機能を持つがゆえに、従来日本語になかったパブリックスペースでの「話調」の一つとしても積極的に取り入れられ、今では幅広い年代で使われるようになったと考えられる。

しかし、原(1992、1993a)のアンケート調査の結果、同じイントネーションパタンを持つ発話でも、あるものは上記の機能を示すかのように、「やや改まった場面」で「あまり親しくない人」に「何かを説明するとき」などに使うという回答が得られたのに対し、あるもの、つまりいわゆる「尻上がり」イントネーションとして「典型的」だとして、非難され得るようなものに対しては、「くだけた」場面で「親しい人」を相手に雑談するような場面で使われるべきもので、「芸能人のまねをして使う」という異なった印象や使用場面観の存在を示す回答があることがわかった。つまり、一部の当該イントネーションは、実際の機能や使用場面とは異なった社会的な意味を与えられていたのである。

実際、1980年代は当該イントネーション使用に対して感情的とも言える非難が多く聞かれ、筆者自身も自分が使っていることに気づかず、その非難を当然視していた。実際と異なる社会的に付与された当該イントネーションの意味やこれに対するイメージは、当時のステレオタイプを色濃く反映した結果であろう。この点に関して本研究では言葉に対するバッシングの一般的傾向を踏まえ、当時の女性の社会進出と関連付けて考察し、当該イントネーションを伴う「口調」が言語上の意味や機能とは別にどのように社会的に意味付けられたか、そのステレオタイプの実際を端的に示した。

ここで扱ったいわゆる「尻上がり」イントネーションについての実証的な諸調査研究は、ある場面における一つの「話調」、あるいは「ある特定の人たち」の「話調」が、実際の言語上の機能や話者の使用意識とは別次元で、他者から様々に評価されるという現実を如実に物語っている。ここにも先に述べたような意義論的観点と名義論的観点の不一致を見ることができるわけだが、これは単なる不一致にとどまることなくステレオタイプを助長し、様々な言葉バッシングへと発展していく遠因にもなっていると考えられる。日本語の句末イントネーション型の一つである「昇降調」としてのみ扱うことができない、いわゆる「尻上がり」イントネーションとしての特徴はこの点にある。この特徴は、多くの言葉バッシング現象にも共通しているものであり、言語と社会とを切り結ぶことによってしか解明できないことは、第2章で述べた通りである。「話調」研究が言語と社会の結節点としての

役割を果たせるということは、その一事例であるいわゆる「尻上がり」イントネーションの社会言語学的考察から理解されたものと考える。

5-2-3. 第3章の概要：句末イントネーションの類型と談話別分布

第3章では、様々な談話における韻律的特徴、「話調」を捉えるために不可欠なイントネーションの統計的分類方法を確立した。本研究では分類に際して客観性を最も重視し、判別分析を用い、句末イントネーションを平調、上昇調、強調、昇降調、下降調、停滞調の6つに分類し、終助詞の有無によってもその音調の特徴を個別に記述した。統計上の分類と知覚上の認知がどの程度一致し、どの程度誤差があるかについては、今後さらに規模の大きな知覚実験を行って確認する必要がある。しかし本研究の方法に従い、計測基準さえ統一すれば、音声の物理的な数値を容易に得ることができ、またインフォーマントを増やすことも可能である。さらに新たなイントネーション型を加えたり、あるいは統合したりして分析することも可能である。ただし、5-1で見てきたプロトタイプによるカテゴリー化の考えに基づけば、各イントネーション型の中心はそれぞれ離散的であるが、周辺についてはその境界が明確にできないだろう、との結論が得られた。境界例の分析も重要であるが、イントネーション相互の音声及び意味や機能の連続性の観点も不可欠であろう。

いずれにせよ、句末のイントネーション型の類型方法と記述方法が確立されたということは、言語生活のあらゆる場面での談話音声について、音声さえあれば、そこに現れる様々なイントネーションを網羅的に扱えるようになったことを意味する。各場面別の言葉調子、「話調」はイントネーションによってのみ決まるのではないが、イントネーションの重要性は否定し難い。特に談話ごとの句末イントネーションの現れ方(イントネーション型の分布状況)の比較には句末イントネーションの客観的で正確な分類と記述(プロトタイプ・カテゴリーの考えに従えば中心と周辺を伴うという条件が付くだろうが)が不可欠であり、本研究によりその方法が確立された意義は大きいと考えられる。

本研究では、ニュース、一般向け小説、子供向け童話の各朗読とアナウンサーによる番組司会、質問に対する医師の回答、討論番組での発言の6場面12談話について5種(読み上げ音声を加えると6種)の句末イントネーション型の出現状況を比較した。子供向け童話朗読の場合は、地の文にも間投助詞の「ね」や終助詞「よ」が使われているため、上昇調や昇降調も若干見られ、会話部分では平調以外の型の出現が多いが、朗読では概して平調の出現割合が高く、ニュースでは100%平調であった。対談番組の司会者(NHKのアナウンサー)も、対話者に語りかけたり、「～ですねえ」のように共感を示したりする以外はほとんど平調であった。一方フォーマルな場面ではあっても、育児相談番組で質問に答える医者の発話になると、平調の割合はかなり低下し、高校生に至っては平調が30%代に

落ち込む一方で昇降調が50%を超えるという結果を得た。それぞれの発言者の社会的な立場、年齢も異なっているため、全てを談話場面の差に還元することはできないが、句末イントネーション型の分布の違い、特に談話中の全句末イントネーション数に占める平調の割合の違いをもたらす主要な要素として談話場面の違いがあることが実証的に確認された。

5-2-4. 第4章の概要：「話調」の科学的分析

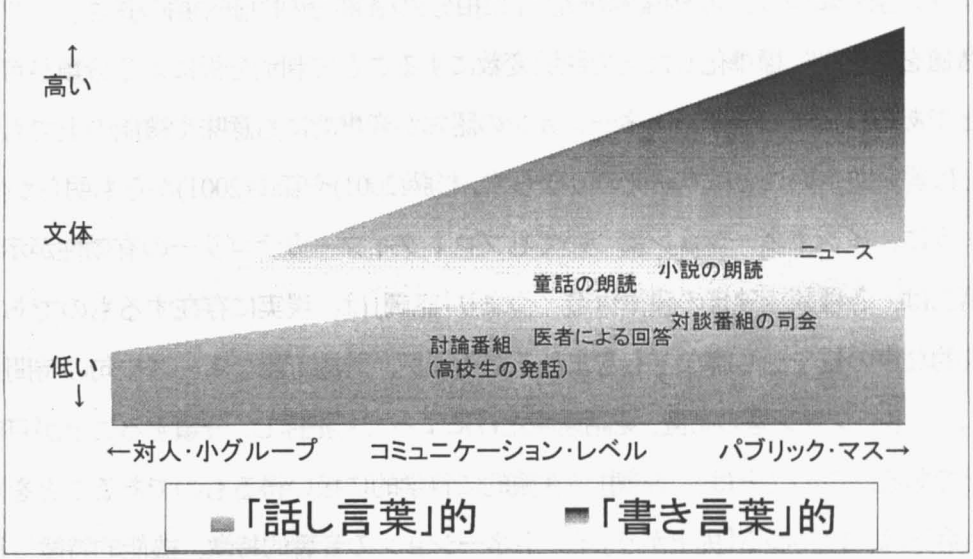
第4章では句末イントネーションの分布以外にも、談話の調子を形成する要素であると考えられるポーズや発話速度、ピッチレンジなどに関して、本研究で扱った談話ごとに個別に検討した。そもそもこれらの談話分類が筆者の恣意によってなされたものでないことは、4-4-1で述べた一般人を対象にした聴取実験の結果からも確認したが、これらの談話の分類(ニュースなのか小説なのか等)がどのようになされるのかについては、物理的に測定可能な値をもとに因子分析を行い、各談話を特徴付ける要因を見出すことで明らかにした。因子分析の結果は各談話に対する筆者の印象とも比較的よく一致しており、漠然とした話し方に対する印象、つまり「話調」は、実際、測定可能な各種の韻律的特徴の集合として捉え得ることを示した。

本研究で扱った音声談話資料は朗読とそれ以外の話し言葉に大別できるが、因子分析の結果得られた因子得点による散布図上でも朗読と話し言葉は第1因子の正負によってほぼきれいに分かれて分布した(第4章図Ⅳ14-1参照)。第1因子の因子負荷量は、ピッチレンジ、1秒当たりの拍数、平調の割合が正で絶対値が大きかった。ピッチレンジ、1秒当たりの拍数は句の時間長とも正の相関があるため、全体としては長い句を淀みなく淡々と発話できる朗読が話し言葉より右側に位置した。朗読の中では右からニュース、小説の朗読、童話朗読の順に並び、話し言葉ではやはり右からNHK アナウンサーによる司会の談話、質問に答える医師の談話、高校生の討論番組での発言の順に並んだ。第1因子の正負により、正(右)側が朗読、負(左)側が話し言葉に分かれたことから、これを「朗読性」の指標と考えることができる。また、第1因子では、非平調の割合の因子負荷量が、負の絶対値が大きいことから、これは同時に「抑揚」の大小に関わる指標であるとも言えるだろう。縦軸(第2因子)に即して見ると、流暢で整った規範的な意味で「上手な」談話ほど下方に、朗読では緩急や抑揚の大きい子供向けの童話朗読がより上に、話し言葉では「素人的」、「稚拙な」談話が上方に位置している。第2因子はある種の「流暢さ」や「整然性」、「改まりの程度」などの指標となっていることが伺える。各象限別に見ると、第1象限には朗読で、総じて緩急抑揚の大きい文芸作品(小説)が、第2象限は朗読で流暢かつ淡々、整然としたアナウンサーによるニュースと司会(男性アナウンサー)が、第3象限は話し言葉で比較的流暢で整った(ある意味で大人の)談話が、第4象限が話し言葉で緩急、抑揚が大きい

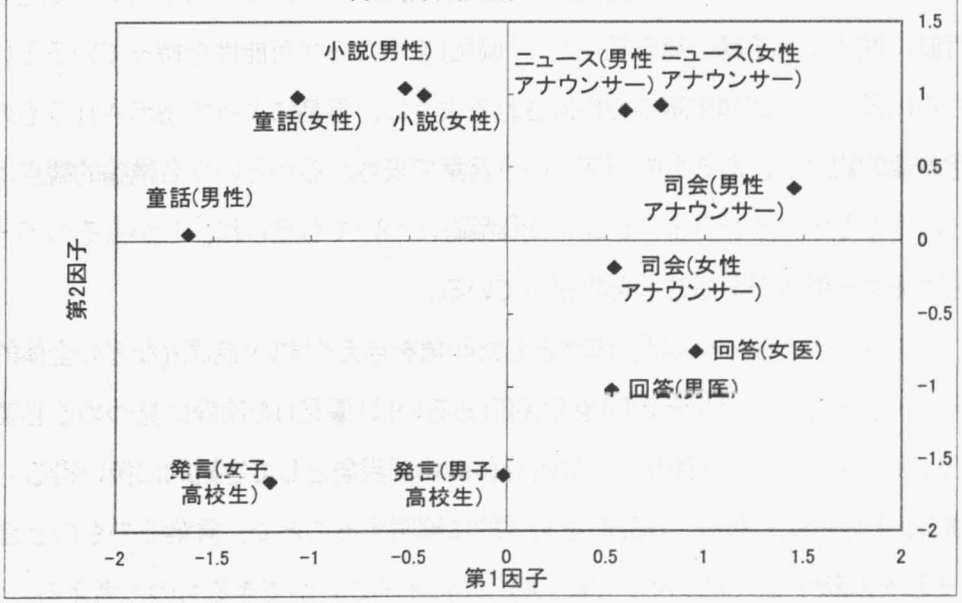
(規範的な視点から言えば「稚拙な」)高校生の談話がそれぞれ位置していた(第4章図Ⅳ14-1、14-3参照)。

ここで再び図Ⅴ4-1(図Ⅳ2)を図Ⅴ4-2と比べてみよう。図Ⅴ4-2は、図Ⅳ14-1の縦軸を反転させた上で、各談話の配置をy=xを軸に対称移動したものである。両図における各談話の配置は非常によく一致していることがわかる。このことは、外見的な各種談話の分類も、実際の韻律的特徴により説明することが可能であるとともに、一般的な談話から受ける印象(「改まった感じ」や「朗読調」など)についても同様に実測可能な韻律的諸要素により客観的に捉えることができるということを示して

図Ⅴ4-1 本研究の談話資料の位置付け(図Ⅳ2)



図Ⅴ4-2 図Ⅳ14-1の縦軸を反転させy=xを軸に線対称移動した図



いると考えられる。つまり、「話調」が科学的分析の対象に耐え得る実在であることが証明されたと言えるだろう。本研究で扱った資料はごく限られているが、「話調」分析のための一つの方法論的枠組はここに確立できたものと考える。

5-2-5. 日本語音声談話の韻律構造、「話調」研究の意義

ここで本研究から得られた結論をまとめる。第一に句末イントネーションの型の分布は、談話における全体の音調、つまり「話調」を決定するのに大きな役割を果たすと考えられるが、この句末イントネーション型の類型は、句末拍(本研究では2拍分)の各部分のF0値や拍の長さ、パワーの値など物理的な数値を話者別に標準化した上で説明変数にすることで判別分析による分類が可能である、ということである。ただし、イントネーションの認知が音声的にも意味や機能の上でも完全な離散性を示すとは言いがたいことは本研究のみならず、杉藤(2001)や森山(2001)からも明らかであり、5-1で述べたように、イントネーションについてもプロトタイプ・カテゴリーの有効性が示された。

そして第二は、各種談話独自の韻律構造、つまり「話調」は、現実に存在するものであり、計測不可能な個人的な声の質や話し癖なども含まれるだろうが、計測可能なポーズや句の時間長、ピッチレンジ、イントネーション型の布置、発話速度だけによっても把握し、分類することが可能である、ということである。このことは、「話調」が客観的に科学的に扱い得るものであることを意味する。

そして、第三は、いわゆる「尻上がり」イントネーションの音響的特徴、機能的特徴、社会言語学的特徴を明らかにする過程で得られた結論だが、ある種の「話調」(のみならず言葉遣いや用語)に対する一般の(非使用者に限らず使用者自身による)イメージや印象、評価は、実際の使用意識とは乖離があるため、その「話調」(言葉)が持つ機能とは別次元で決定されることがある、ということである。これは、言語行動に関するある種の無自覚さが、「偏見」をもたらす可能性を持っているということを意味する。さらに言えば、認知言語学で指摘されるように、言葉によって指示されるものが何であるかという意義論的観点と、あるものが何という言葉で表されるかという名議論的観点は必ずしも一致しないということが、イントネーションや「話調」についても見られ、しかもその不一致がある種の「偏見」を助長する働きがあることを物語っている。

したがって、第四を挙げるとすれば、漠然とした印象を与えやすい「話調」(などの全体的な話し方など)についてこそ、科学的な目でその印象や評価(あるいは「偏見」)を冷静に見つめる必要がある、ということであろう。先に述べた通り、「話調」自体は物理現象として客観的に扱い得るものであるから、技術的には十分可能である。「話調」を科学的に解明することで、言葉そのものと言葉が交わされる社会、それを解釈する人間の精神活動を明らかにすることができるものと考える。つまり「話

調」研究によって認知社会言語学への道が拓かれるということをも意味すると言える。

5-3.「話調」研究の今後の課題と展望

以上、本研究での結論を踏まえ、はじめに5-3-1では今後の課題について具体的に考える。次いで、5-3-2では「話調」研究の将来的な展望、より長期的課題について述べる。

5-3-1.「話調」研究の今後の課題

「話調」研究の今後の課題の一つは、話者や聞き手の年齢や性別、社会的属性別、談話場面別に「話調」の異同を共時的に幅広く明らかにすることである。特に本研究で扱えなかった、より改まりの度合いの低い雑談や複数話者の重複発話が含まれるような話し合いについても詳細に観察する必要がある。また各言語・方言間の比較「話調」論なども可能であろうし、方言と共通語の使い分けという面からパラディグマティックに「話調」を扱うことも可能であろう。非日本語母語話者の「話調」を扱えば、日本語教育や対照研究に資することもできると考える。それと同時に本研究では扱えなかった句末イントネーションの型も含め、日本語に現れる各種の句末イントネーションの型について、それぞれの境界を知覚実験により明確にすることや、典型を明確にすることも重要な課題である。このような「話調」の共時研究を進めていく上で必要になるのは、第4章でもその不十分さを指摘したが、「場面論」という大きな枠組みの構築であろう。これはまた日本語研究に独自の分野と考えられる「言語生活」研究とも関わってくるだろうが、これらの知見を総合した、何らかの理論的な枠組みが必要になると考えられる。

さらに「話調」の通時的研究も無視し得ない課題である。第2章でも触れたように、社会の変化につれ人々の言語生活にも変化が生じる。端的な例として、戦後民主主義は一般の人々にパブリックスペースでの発言という場面をもたらした。また最近の例としては携帯電話や電子メールの登場によるコミュニケーションの形態の変化が挙げられるだろう。そこでの文(話)体や表記などが新たな言語学的関心事であることに疑問の余地はない。このような新しい媒体の出現による言語空間の拡大は技術革新のたびにこれからも生じ得る。また、日本語を母語としない人が増えたり、生育地とは異なった地域で社会参加する成人が増加したりするなどの人口移動によっても、新たな言語空間が創出される可能性がある。実際、第2章で述べたように日本人の言語生活に現れる各種の談話場面の内容も変化してきたし、これからも変化し得ることを考えると、通時的な視座は不可欠である。文字資料に比べ場面のバリエーション的にも、全体量的にも限界はあるが、古い録音資料などをもとに